時代の申し子？『メサイア』の誕生

小宮 正安

有名音楽家の役割とは？

来年生誕250周年を迎えるベートーヴェン（1770 ～ 1827）が、その後半生にフリーの音楽家としての活動を意図的に始める以前の時代のこと。

ヨーロッパ世界において、音楽家としてある程度以上の経済的・社会的地位を収めるにあたっては、どこかの宮廷に仕えるという方法が普通だった。18世紀までの音楽家が、何かしらの宮廷と密接な関係を持ちながら、活動を繰り広げていた所以である。

ましてや、ヘンデル（1685 ～ 1759）のように抜きんでた才能を具（そな）えた音楽家の場合、宮廷における役割は、単に音楽を作ったり奏でたりするだけではなかった。君主付きの文化大使として、音楽を通じた君主礼賛や、宮廷で行われる外交のプロデュース等、その活動は多岐にわたっていたのである。

不安定な国政の直中（ただなか）で

こうした事情を受けて、最近では一つの説が有力になりつつある。ヘンデルは、彼が後半生ロンドンで仕えることとなったイギリス王、正確にはグレートブリテン王ジョージ1世（1660 ～ 1727）直属のスパイ的存在だった…。

ジョージ1世は、元々ドイツのハノーファ選帝侯国の君主だった。ところが、それまでイギリスで続いてきたスチュアート王朝が断絶したことを受け、いわば「外様（とざま）」の状態でロンドンへ乗り込んできたのである。そのため、不安定な政治基盤を少しでも盤石なものとするべく、以前ハノーファで自分に仕えていた宮廷楽長ヘンデルに、国内外の情勢を密かに探らせるという作戦に出た…。

しかも当時のイギリスは、スコットランドの貴族が僭称（せんしょう）王（継承権と関係なく、自らを王と名乗る人物）を奉って反乱を起こしたり、南海泡沫（ほうまつ）事件と呼ばれるバブル経済の崩壊が起きたり、といった具合に上へ下への動乱期だった。また、ジョージ1世が没した後は、息子のジョージ2世（1683 ～ 1760）が王位を継いだものの、国内の安定からは程遠い状態が続いた。そうした最中の1741年に、アイルランドの中心都市ダブリンで初演されたのが『メサイア』である。

ジョージ2世はなぜ立ち上がった？

現在でもそうだが、アイルランドでは伝統的に、グレートブリテンを中心とするイギリスの中央に対する反感が強い。ましてやスコットランドで反乱が起きている最中となると、アイルランドの情勢を探ることは、ジョージ2世にとっても必須だった。

そこで、敢えてスコットランドの反乱貴族に共感を寄せている詩人ジェネンズ（1700 ～ 73）の台本にヘンデルが曲をつけ、アイルランドでそれを上演した末、彼の地の反応を探ろうとした、という見方が生まれてくる。（ジェネンズは熱心なキリスト教徒であったため、それにヘンデルが共感した、という従来の見方ももちろん成り立つが。）

なお『メサイア』がロンドンで初めて上演されたのは1743年だが、その際はこのタイトルは用いられず、また地味な宣伝しかなされなかった。ただしジョージ2世当人は臨席しており、「ハレルヤ・コーラス」の部分で立ち上がったというエピソードはあまりに有名だ。ところでその話が本当だとしても、その理由は何だったのだろう。

壮麗な曲想によって「王の中の王」という歌詞が繰り返される中、王とは自分のことを指していると受け取って感激したのか？ それとも、スコットランドの反乱軍が担ぐ僭称王のことを意味していると思って激怒したのか？

孤児捨子養育院の政治性

それでも1746年、スコットランドを中心とした反乱は完全に鎮圧される。そうした中、1749年にはロンドンで、今度は『メサイア』のタイトルを高らかに歌って当オラトリオが上演された。さらに翌50年からは毎年のように、この街の孤児捨子養育院で上演がおこなわれるようになった。いわば、のっぴきならない政治性が薄まる中で、『メサイア』を純粋に宗教的音楽作品として受け入れる状況が整ったということであり、この間に当作品の改訂も積極的におこなわれていった。

ただし、この養育院の成り立ちを見ると、これもなかなかに政治的とはいえよう。南海泡沫事件にまで至るイギリスの好景気を、商業船船長として、また成功した商人として支えたコーラム（1668 ～ 1751）という人物が、ジョージ2世の特許を得て始めたのがこの施設だからである。経済的繁栄の陰で社会問題化しつつある孤児や捨子を保護し教育しようというもので、創設会員にはヘンデルをはじめ著名人たちが名を連ねた。

しかもこの養育院の会議場や礼拝堂は、文化的な催しの場としても用いられてゆく。1749年にはウェールズの王子夫妻の列席の下、ヘンデル作品を集めた演奏会が開かれた（ちなみにウェールズでは、それまで2世紀あまりの時間をかけて、グレートブリテンとの融和がおこなわれてきた）。さらに翌50年、ヘンデルの提唱で礼拝堂にオルガンが設置され、『メサイア』の上演もおこなわれるようになった、というわけである。

となると、この養育院が親グレートブリテンの象徴的慈善文化施設として捉えられていたという文脈が見えてくる。またそこで演奏される『メサイア』が、政治的文脈から一応切り離されたとはいえ、救世主イエスと同時に、イギリス王ジョージ2世を紛うことなく讃える作品と化したことも。

※本稿でも参照したが、ヘンデルと『メサイア』との関係については、三ヶ尻正『ヘンデルが駆け抜けた時代』（春秋社）や、山田由美子『原初バブルと《メサイア》伝説』（世界思想社）に詳しい。

（こみや まさやす・ヨーロッパ文化史研究家）